

〔曲 名〕 Alla Stella Confidente

希望の星へ

〔曲 種〕 Romanza

〔作曲者〕 Vincenzo Robaudi

ヴィンチェンツォ ロバウディ

〔編 曲〕 Jiro Nakano

中野二郎

作曲者は1819年7月21日イタリア・トリノの少し北方、サン=ベニーニョ・カナヴェーゼに生まれ、1882年12月2日トリノに逝いたイタリア陸軍の将軍で、ディレッタントの作曲家、多くの歌曲の作品があるが、

1866年この「希望の星へ」が発表せられるや、忽（たちま）ち全世界に伝播し、広く歌われるに到った。

その後、この歌の姉妹曲として「私を忘れないで」も著名ではあるが、到底前者には及ばない。

洋楽には最も後進国である本邦でも既に明治の時代に上演されているので、少しその経緯を述べておきたい。

明治27年（1894年）10月13日、アメリカのマンドリニスト、サムエル・アデルスタインがイタリア、フランスにマンドリンを学びに行った帰途（多分）

横浜に立ち寄ってコンサートを開いたその曲目の中に本曲が載っている。

これは東京の斯楽研究家・工藤哲郎氏の辛抱強い探索によって判明したことを感謝したい。

更に我が国に初めてマンドリンを贐（もたら）した人として知られる比留間賢八氏が、

明治31年1月21日、東京・神田美土代町の基督教青年会館で開かれた明治音楽会第1回演奏会にこの曲の原曲編成で、

歌・納所辨次郎、チェロ・比留間賢八、ピアノ・島崎赤太郎で三部合奏として上演している。

曲名はロマンス（大和田建樹、ロバウデ曲）となっており、先年飯島国男氏の出版した「比留間賢八の生涯」にも載っている。

更に愕きべきことは、かの「鉄道唱歌」を書いた大和田建樹が、「月の少女」と題して作歌納所辨次郎編曲で日本で出版されていたことである。

とすれば過去には日本でも相当親しまれた曲のようでもある。

少し新しいところでは1914年11月、京都声楽会第2回音楽演奏会に同志社のマンドリン合奏団が出演した折、

ワルターの「アルラ・スチルラ・コンフィデンテ」と云うのがそれである。

ワルターとは「カルロ・グラツィアーニ・ワルテル」のことで、早くからこの人の編曲で親しまれていたのである。

イタリア・リコルディ出版の8冊のイタリアン・マンドリンアルバムには、この種の佳曲が沢山含まれ、

大正9年に初めてマンドリンを手にした筆者もその年の秋には、既にこの曲の魅力にとりつかれていたのである。

グラツィアーニ・ワルテルの編曲は二つのマンドリンとギター又はピアノの編成なので、マンドラその他を加え、調も原調二長調にして編曲し直した。

本曲は全て19世紀出版のものであるので、当時の様子を偲ぶ為にも銅板による表紙を加えた。

古い出版譜なので、鮮明さを欠くところがあるが、本曲は優れたディレンタントの「カロリーナ・タッティーニ伯爵夫人」に贈られたことが記されている。

1993年 4月 発行

マンドリン合奏曲集5集（JMU版 パート譜付）より